

Ohminato High School キャリアデザイン部通信

1学期には、1年次は“起業家教育”で、ビジネスの視点から地域社会の魅力を掘り起こす学習を始めました。2年次は“針路学”で下北ジオパークを題材に、自己探求や地域の魅力発見を関連させる活動を行いました。そして、3年次では高校での探究活動の総仕上げとしてポスターセッション形式で発表を行いました。これからも地域や周りの人との関わりを通じて、自己を掘り下げ、社会につながっていく活動を目指していきましょう。

第1号 2024年10月8日
発行：青森県立大湊高等学校
キャリアデザイン部

1 1年次 産業社会と人間 起業家教育

1年次では、自己理解や社会に貢献できる力を育成するために、地域を活かすアイデアの創生に取り組んでいます。ビジネスアイデアを考える学習を通じて、地域課題を捉え、具体的な活動の可能性を探っています。

起業家教育講演会

- I 5月8日 中小企業アドバイザー鈴木健氏
 - II 7月3日 中小企業アドバイザー永田洋子氏
 - III 7月10日 日本政策金融公庫 本田正人氏
 - IV 7月16日 MAHO-LA CREATIVE 櫻井亮氏
- 内容 ビジネスアイデアの立案・掘り下げ・インタビュー方法の演習



上級学校見学会

- 日程 7月4日（水）
場所 青森中央学院大学・短期大学
内容 大学・短大の模擬授業や学生の発表を体験し、視野を広げ、進路を考える。



企業インタビュー

- 日程 7月30日（火）
場所 大湊高校
内容 地元の企業の方に、自分たちの考えたビジネスアイデアを発表してアドバイスをいただき、ブラッシュアップする、また、各企業の取り組みについてインタビューを行い、地域の現状や課題を学ぶ。

御協力いただいた企業

磯沼建設 青い森信用金庫 ウェルネスパーク
熊谷建設工業 木村鉄工所 下北交通 千葉塗装
東京堂 北新機材 むつつのたね リサイクル燃料
（11社の皆様に御協力いただきました。）

1年次講評

『自分たちの力で
下北をよりよくする人財に』

今年度の産業社会と人間は起業家教育を取り入れています。自分の興味のあることや下北のよさを活かして、高校生ならではの発想でアイデアを膨らませています。0から1を生み出すことの難しさ、それを発展させることの楽しさを学んでもらいたいです。たくさんの社会人と話す機会があります。自分の将来を考えながら、いただいた言葉を大切にしてください。

（1年次担任 小原）

2 2年次 針路学 課題研究

自己探求×下北ジオ

- 日程 4月～5月
内容 自分の関心事や下北ジオパークについて掘り下げ、自己探求と地域探究を結びつける。



自分の関心事を掘り下げ、さらに地域のジオパークの魅力や課題と重なり合う点がないか検証し、自分の関心と地域の課題の接点を探った。

ジオ・クエスト

- 日程 6月13日（水）
内容 4つのコースに分かれて各地域の方にインタビューを行う。
東通コース、恐山・薬研コース、
大間・風間浦コース、脇野沢・川内コース



実際に現地に行って、直接地域の方にインタビューすることで、下北ならではの魅力や課題、地域の方々の工夫や足跡を伺った。自分たちの疑問や探究テーマを投げかけることで、生きた地元の声を聞くことができた。

ジオ・クエスト 課題研究中間発表

- 日程 7月22日 各教室
内容 ジオ・クエストでのインタビューや体験をもとに、自分の課題と結び付けて、研究内容の中間発表を行う。



2年次講評

すべての学びが
一本に繋がる

ジオ・クエスト前に座学で事前調査をし、そこで得た知識を確かめる良い機会となりました。普段見慣れていると思っていた地元でも、熱意を持って働く方々に出会い、視点を変えることを学び、自分の足で歩くことで、新たな疑問と気づきを得ました。

2学期以降はジオ・クエストで実際に調査し得た気づきを一つの糧とし、学びをより深めていきます。今後も多くの取り組みがありますが、一つ一つのプロセスが終わるたびに、「体験し終わった」と区切りをつけるのではなく、すべての学びがどこかで「一本に繋がる」と思って、課題研究に励んでほしいです。

（2年次担任 漆館）



3 3 年次 針路学 課題研究

『発表の仕方講演会』

目的 課題研究発表会に向けて、効果的な内容の組み立て方や話し方を学び、実践演習を行う。

日程 7月13日(木)

講師 八戸工業大学 教授 高橋史朗氏



各自が関心を持つテーマについて、2年次から、地域や社会貢献と関連させて課題研究を行ってきました。そして3年次ではゼミ形式で個人の課題を掘り下げ、全員がポスターセッションでの発表に取り組みました。当日は、全校生徒や来賓を前に、聴衆とコミュニケーションを取りながら発表を行いました。

探究ゼミ

3年次の1学期は、ゼミ形式で10~20人が集まり、それぞれの課題研究に取り組んだ。研究成果はポスターの形でまとめた。



課題研究発表会

目的 課題研究発表会の成果を発表し、探究型の学習活動を発展させる。発表会をとおして思考力・判断力・表現力の育成を図るとともに、地域に本校の取り組みを紹介・理解してもらおう。

日程 7月25日(木) ポスターセッション

会場 大湊高校



課題研究

研究成果報告書

(1) タイトル

「ケアとは何か」～女子高校生が考える看護ケアのコミュニケーション～

(2) キーワード(分野や関連する用語)

終末期医療
緩和ケア
医療倫理

(3) 研究の背景となった事柄や経験・事前学習の結果

幼い頃から医療職に興味があり、怪我や病気を治療するのではなく、怪我や病気の人の不安や苦しみを和らげる役割を担い、その人がその人らしくられる看護を役割を担いたいという看護師を目指している。本研究では患者の思いに寄り添うための看護ケアのコミュニケーションについて、ケアを行う際に何が必要なのか、そのためにできることは何かについて考えたい。

対人援助ケアの研究者である京都ノートルダム女子大学名誉教授 村田久行氏(1994)は「現在の日本の医療現場においてはケアの概念よりもケアの概念が先行している」と述べている。「ケア(cure)」という語は病気を治す、患者を矯正するといった意味を持っている。現代の急速な医療技術の発達に伴い病気の治療、症状の回復といった点に着目し見直し発展を遂げてきた。治る病が増え、寿命が増え、ケアの概念は医療現場において確固たる地位を獲得した。しかし、高度な医療技術の発展にも関わらずケアによっては対応できない患者の痛みが現代において顕在化していると村田氏は指摘する。ケアの必要性は医療のデータからも読み取ることができる。現在のがんの罹患患者数は年々増加している。また、がんの死亡率も高まっている。このことから、ケアの及ばない範囲が拡大していることがわかる。

(4) 研究目的・意義・仮説

ケアとケアは本来一つのものとして対人援助行為を支えてきた概念であるが、両者は異なる認識を起点としている。ケアは認識の基点を「生」としているのに対し、ケアの認識は「老い・病い・死」を基点としている。そのため、ケアは患者を健康な生を退院した者として捉え患者を正常な状態に引き戻そうとする。つまり、健康者に対する患者、正常者対異常者、強者対弱者という分断された施すものと施される者という受動的な関係のうに援助関係が形成されることになる。

ケアが先行されている現代社会では、分断された受動関係によって生じた現代社会特有の精神的苦痛が生れる。そこで、「現代社会特有の精神的苦痛を軽減させるために何ができるのか」という問いを立てた。この問いに対し、精神的苦痛を緩和する、患者の精神的痛みを寄り添うためにできることとして、援助者と非援助者の関係に上下関係が生じないよう、同じ目線でコミュニケーションをとることが有効である。

(5) 研究方法

1. 先行研究を調べ
2. 調べたことを使い実例を参考に看護計画を立てる

3. 先行研究で調べたコミュニケーションの方法を特別養護老人ホーム桜木園に訪問し、施設での利用者さんとの会話をプロセスレコードにまとめる

(6) 結果・考察

2.3で行った看護計画とプロセスレコードは青森中央大学の松島教授に評価していただいた。プロセスレコードに記述できるように短い問いかけをしている間に利用者さんの返答から現在の生活に対するニーズを読み取ることができた。また、対話をしているうちに表情が柔らかくなっていき感情を表情や態度に表してくれる様になった。

先行研究を調べ事前にケアの概念を知ったことで、コミュニケーションを行う際の考え方が変化した。同じ目線に立つということ意識したコミュニケーションが可能となり、二者構造が生じないようなコミュニケーションを実践できた。そのことにより、利用者さんの言葉の中からニーズを読み取ることができた。また、話すだけでなく利用者さんの話を傾聴することが重要であるということを確認できた。相手の想いに傾聴することなく状況を変化させる援助ばかりに力を使いしまったり、相手の想いを変えることばかりに固執してしまいがちなことを強いてしまったりすることになる。そうならないように、利用者さんがニーズを開示してくれない可能性がある。そのため、傾聴が最も重要なアプローチだということができる。

プロセスレコードを作成したことで自分のコミュニケーションの癖を理解することができ、今後気をつけることや強みとなることを知ることができた。そして、特別養護老人ホーム桜木で人生の先輩である利用者さんたちとお話をし、声がけをする時の立ち位置や言葉遣い、態度で敬意を示すことが大切だと気づくことができた。

(7) 結論・今後の展望・新たに生まれた疑問

プロセスレコードの分析では二者構造が生れないようなコミュニケーションをとることで利用者さんがニーズを開示してくれるようになるということが検証された。コミュニケーションのアプローチは援助者側からの働きかけが大きい。援助者と非援助者の両者が行えることとして、自分の死に対して準備を行い、自己決定を行うときのもとなる考え方や、自分自身の死だけでなく身近な人の終末と関わる際の同じ有限な存在である人間としての関わり方を知ってもらうことを目的とし(4)研究目的・意義・仮説で述べた「死の準備教育(Death Education)」を考案したい。死の準備教育を実施する前と後でアンケートを取り死に対するイメージが変化があるか、ないかでの目的が達成されたかを確認する。

援助者と非援助者の二方向からの精神的苦痛を軽減させるアプローチを考えることで同じ目線でケアを行うことのできる相互関係の実現を目指していきたい。

(8) 引用・参考文献

- i. 村田 久行
『ケアの思想と対人援助-終末期医療と福祉の現場から』
(川島書店,1994)P49
- ii. 図表1-2-2 性別・年齢階級別がん罹患患者数、1975年・2013年(平成30年版厚生労働省白書ー障害や病気など向き合い、すべての人が活躍できる社会にー)
- iii. 厚生労働省 令和3年(2021)人口動態統計(報告書・人口動態調査の結果の概要)

越田 透伍「終末期患者のスピリチュアルペインとそのケア」

～マルティン・ハイデガー『存在と時間』における現存の分析をもとに～

3 年次 講演

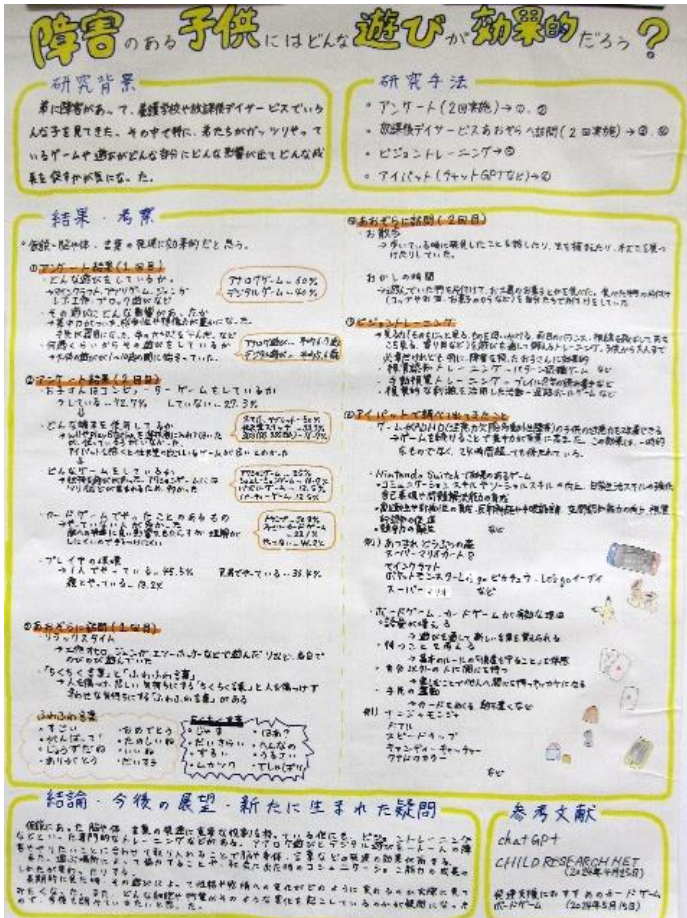
最適解を求め、相手に伝える

今回の研究活動と発表会を通して、生徒たちは探究心を深めるだけでなく、問題解決能力や協力する力を大いに伸ばしました。生徒一人一人が熱中できるテーマを選び、調査や実験を重ねる中で、難題に直面しながらも工夫を凝らし、最適な答えを見つけ出す姿は大変頼もしく感じられました。

また、発表会では自分の意見を整理し、相手に伝える力が付き、今後の学びに対する自信を持つ良い機会となりました。

(3年次担任 田畑)

課題研究発表会 ポスターセッション



「あづましん棚の作成
～机を拡張するキットの考案～」

「障害のある子供にはどんな遊び
が効果的だろうか？」

課外活動チャレンジ ソトマナ

ソトマナ

誰でも参加できる活動です。校外の様々なボランティアや活動、防災プロジェクトやスキルアップなど、多くの仲間がチャレンジしています。これからも積極的に参加してください。



東通原発研修



東通原発研修

「シン・ベこもち～郷土料理の未来を創造するPart II」

ボランティアにチャレンジ



東電福島第一原発研修



震災から学ぶプロジェクト(岩手県宮古市田老町)